【公報種別】特許法第１７条の２の規定による補正の掲載
【部門区分】第３部門第２区分
【発行日】令和7年4月25日(2025.4.25)

【国際公開番号】WO2024/085256
【出願番号】特願2024-551876(P2024-551876)
【国際特許分類】
C07C 41/06(2006.01)
C07C 43/11(2006.01)
B01J 29/40(2006.01)
B01J 29/70(2006.01)
C07B 61/00(2006.01)
【FI】
C07C 41/06
C07C 43/11
B01J 29/40 Z
B01J 29/70 Z
C07B 61/00 300

【手続補正書】
【提出日】令和7年4月9日(2025.4.9)
【手続補正１】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００３７
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００３７】
本発明における反応工程では、結晶性メタロシリケートを触媒に用い、１１０～２５０℃にてオレフィンと（ポリ）アルキレングリコールを溶媒の存在下に液相が均一な溶液として反応させることを特徴とするものである。溶媒を使用しないときは、原料である（ポリ）アルキレングリコールおよびオレフィンは互いに僅かな溶解度分しか分配されず、触媒である結晶性メタロシリケートは（ポリ）アルキレングリコール相に分配され、生成物である（ポリ）アルキレングリコールモノアルキルエーテルはオレフィン相に分配される事により、反応速度が非常に遅くなるが、溶媒の使用により液相が均一になりオレフィンと触媒とが接触しやすくなって（ポリ）アルキレングリコールとの反応速度が速くなる。ここで液相が均一になるとは、１１０°Ｃ以上の反応温度で液相が均一になればよく、昇温したときまたは反応が進行したとき（例えば、所定の反応温度に到達した時から１２０分経過後）に液相が均一になればよく、１１０°Ｃより低い温度で混合したときには液相は均一になっていなくてもよい。このように液相を均一にする溶媒の使用量は、オレフィンと（ポリ）アルキレングリコールとの総和に対して３５質量％以上であることが好ましく、６０質量％以上であることがより好ましく、８０質量％以上であることがさらに好ましく、１００質量％を超えることが特に好ましい。なお、溶媒の使用量の上限は、オレフィンと（ポリ）アルキレングリコールとの総和に対して、例えば、３００質量％以下であり、好ましくは２５０質量％以下であり、より好ましくは２００質量％以下である。
【手続補正２】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００６１
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００６１】

（転化率、選択率、収率の算出）

実施例、比較例で得られた各層のガスクロマトグラフ（ＧＣ）による分析値から下記の計算式により求めた。なお、転化率（オレフィン転化率（％））、選択率（（ポリ）アルキレングリコールモノアルキルエーテル選択率（％））および収率（（ポリ）アルキレングリコールモノアルキルエーテル収率（％））は、各層における値を算出し、その合計量を使用した。